

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター

題字 松井一實 会長

平和文化月間に様々なイベントを開催しました！

2021年1月22日の核兵器禁止条約の発効により、核兵器のない世界の実現に向け新たなスタートが切られましたが、国益追求を重視する現下の国際情勢にあっては、為政者の核抑止論からの解放は程遠い状況と言わざるを得ません。こうした中、人間の暴力性を象徴する核兵器の廃絶が市民社会の総意となり、政策転換を促すような社会状況を形成していくことがますます必要となります。そのためには、市民一人一人が日常生活の中で平和について考え行動し、戦争や紛争、差別や偏見なども含むあらゆる暴力を正当化することがない状況、つまり「平和文化」が市民社会に根付いた状況にすることが重要と考えられます。

こうした考えの下、広島市が昨年より毎年11月を「平和文化月間」と定めたことを受け、本財団では広島市と連携し、期間中に「平和」への思いの共有につながる「文化」を振興する様々なイベントを開催しました。多くの方々が参加してください、平和への思いをあらたにしました。

平和文化月間
ロゴマーク

期間中の各種イベント等の際には、平和文化月間のイメージカラーであるイエローグリーンのPRリボンの着用や月間ロゴマークにより「平和文化」をPRするとともに、賛同を呼びかけました。

平和文化講演会【11/1（月）】

平和文化月間オープニングイベントとして、俳優のサヘル・ローズさんをお迎えし、「出会いこそ、生きる力」をテーマに、平和文化講演会を開催しました。

俳優として映画、舞台、テレビなどで活動される一方、国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務めるなど、幅広く活躍していらっしゃるサヘルさんですが、イランで生まれ、4歳まで孤児院で育ち、養母と出会い8歳で来日後も、苦しく



講演するサヘル・ローズさん

で大変な生活を経験してこられました。そうした中、様々な人との出会いを通して、前向きに生きるきっかけとなったエピソードの数々は、心温まるものば

かりで、自分の在り方や人との関わり方を深く考えさせられるものでした。

辛い過去を乗り越え、明るく素敵な笑顔で語られるサヘルさんのたくさんの前向きなメッセージは、来場者の心に大きく響き、会場は暖かい感動の輪に包まれました。平和文化の取組への共感と賛同を示されたサヘルさんのお話は、平和を願うヒロシマの心、平和文化の心に通じるものであり、平和文化月間の幕開けにふさわしいオープニングイベントとなりました。

市民平和文化イベント ～つなぐ平和への思い、未来へ～【11/3（水・祝）】

広島国際会議場の大会議室ダリアで「市民平和文化イベント ～つなぐ平和への思い、未来へ～」を開催しました。広島で平和活動に取り組む若者や市民団体10団体が、ステージ発表や展示発表で、日頃の活動や平和への思いを発信しました。

目次

平和文化月間に様々なイベントを開催しました！	1
被爆体験記朗読会を開催しました	4
国際フェスタ2021	5
「原爆の絵」が完成／	
東京オリンピック・パラリンピックに合わせたヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展	7
被爆体験記「平和がどんなに大切なものか」(若山登美子)	8

資料館「市民が描いた原爆の絵」展示入替	9
資料展「原爆ドームの軌跡」／国際交流・協力課「民族衣装の日」	10
水引細工ワークショップを開催／「世界の青少年による平和活動交流会」／	
記憶を伝える海外の博物館と結ぶオンラインイベント	11
「国際平和デー」記念行事／坪井直さんを偲ぶ	12



オープニングでは、松井一實^{まつい かずみ}広島市長より、「音楽や美術といった芸術文化活動の発表を通じて、平和への思いを共有するイベントは、まさに『平和文化』を根付かせるものであり、多くの市民の皆様に御参加いただいていることを嬉しく思います」との挨拶がありました。

<ステージ発表>

4団体が、それぞれの取組を発表し、平和のメッセージを発信しました。

どの演目も、ステージ発表者と参加者が一体となって、平和の大切さを改めて考えるすばらしいステージ発表となりました。

◇杉並台幼稚園(音楽劇「ぞうれっしゃがやってきた」)

戦争を生き延びた2頭のゾウを飼育する愛知県名古屋市の東山動物園に、日本各地の子どもたちが特別列車で訪れた実話を基に制作された絵本を題材に、園児たちが地元のオカリナグループの演奏のもと、可愛らしい歌声と踊りで音楽劇を演じました。会場には絵本の作者である小出隆司^{こいで たかし}氏も駆けつけ、園児たちの演技を觀賞し、最後には、広島市長とともにステージ上で園児たちと一緒にフィナーレを盛り上げました。



「ぞうれっしゃがやってきた」を演じる園児たちと、松井広島市長、作者の小出氏

◇千田パンフルート合唱隊

かつて広島市立千田小学校に生育して枯れてしまった被爆樹木「カイヅカイブキ」を部材に作られた楽器「パンフルート」の演奏と合唱を披露しました。最後の、広島東洋カープの応援歌「それ行けカープ」では、観客の手拍子が沸き起こり、合唱隊と観客が一体となって楽しい時間を過ごしました。



千田パンフルート合唱隊によるパンフルートの演奏

◇中国新聞ジュニアライター

自分たちの活動紹介とともに、メンバーの平和に対する思い、若者が平和のためにできることなどを提言しました。原爆ドームに関連したクイズも出題し、観客と交流を深める発表となりました。



中国新聞ジュニアライターによるプレゼンテーション

◇平和創作劇 I PRAY

ステージ発表の最後の演目として、人類史上初めて広島に原子爆弾が投下されてから復興までを力強く描いた平和創作劇を上演しました。4歳から小中学生、大人を含めた17名が演じ、二度と核兵器の使用という惨事が繰り返されないよう、祈りを込めたパフォーマンスに、会場は感動に包まれました。



平和創作劇 I PRAY によるパフォーマンス

<展示発表>

6団体がそれぞれの日頃の活動成果と、平和への思いを発表しました。会場内には、子どもたちが折り鶴再生紙に描いた絵を缶バッジに加工して記念品として持ち帰ってもらうコーナーや、ハト型のシールに平和のメッセージを書いて貼り付ける参加体験型コーナーも設け、来場者にも平和への思いを形にしてもらいました。加えて、平和文化月間中の各種イベントのチラシを設置した情報コーナーも設け、月間行事をPRしました。



参加団体による展示の様子

◇広島市立大学平和活動サークル S 2

活動紹介とともに、佐々木禎子^{ささき けいこ}さんが折った折り鶴と同じ大きさの鶴を折る体験型ワークショップを行い、来場者の平和への思いを込めた小さな折り鶴がたくさん作られました。

◇平和と美術と音楽と with おきあがりこぼしプロジェクト

福島の伝統工芸品である「おきあがりこぼし」に様々なメッセージを込めて絵付けされた100体以上のおきあがりこぼしと、松井広島市長や有名漫画家たちが制作したおきあがりこぼしが展示され、多くの来場者が写真に収めるなど、展示に見入っていました。

◇広島市立広島商業高等学校ピースデパート

広島商業高等学校のピースデパートや、姉妹校の長崎市立長崎商業高等学校との共同平和宣言、広島長崎平和の鐘プロジェクト、共同開発商品などを通じた交流が紹介されました。来場した小さな子どもも平和の鐘を鳴らし、時折会場内に鐘の音色が響き渡りました。

◇広島なぎさ中学校・高等学校中高国際部

「小さな祈りの影絵展」の展示と中高国際部の部員によるこれまでの活動と影絵が紹介され、来場者は幻想的な影絵の世界に引き込まれていました。

◇広島市立広島工業高等学校機械科

銅板の折り鶴制作の実演とワークショップでは、制

作過程の展示に加え、参加者が実際に銅板の折り鶴を制作する体験コーナーがあり、多くの子どもたちが機械科の生徒たちの指導を受けながら銅板の折り鶴の制作に取り組んでいました。

◇ホロコースト記念館 Small Hands

同記念館と24年間にわたり活動が続けている子どものボランティアグループ「Small Hands」の活動紹介と、広島では初展示となる強制収容所で使用されていた「子どもの収容者服（実物）」や、子どもたちが接ぎ木で増やしている「アンネのバラ」が展示され、来場者が足を止めて熱心に説明を聞いていました。

＜来場者のメッセージ＞

会場内に設けた来場者からのメッセージコーナーには、多くのメッセージが寄せられました。

- ・「核なき世界の実現を！世界のみんなが笑顔ですごせますように」
- ・「世界中の人々が涙を忘れて毎日を笑顔ですごせる時が訪れますように」
- ・「みんながやさしいころもってくらせる、そんなせかいになりますように…」

会場にはおよそ300人が訪れ、ステージ発表の鑑賞や体験コーナー等での交流・情報交換などを行い、芸術文化活動を通して参加者と来場者が「平和文化」を体験できた一日となりました。

このイベントへの参加を通して、平和の取組を行っている若い世代同士の交流も図ることができ、また、その取組を応援するあたたかい声掛けなどもあり、参加者にとっても来場者にとっても平和への思いを新たにできる機会となりました。

オンライン配信 被爆ピアノコンサート～被爆ピアノと奏でる平和の調べ～【11/13(土) 配信開始】

平和文化の形は様々で、平和への願いをこめて表現される音楽もその一つです。私たちの日常の中で身近な「音楽」を通じて平和について考えていただくため、広島にゆかりのある演奏家が、原爆犠牲者への慰霊と追悼を込めて演奏する被爆ピアノコンサートを11月13日（土）からオンライン配信し、これまでに約850人に視聴いただきました。

使用した被爆ピアノは、平和記念公園のレストハウスの2階に展示してある河本明子さんが愛奏していたピアノです。明子さんは19歳の時に学徒動員の作業中に被爆し、原爆投下翌日の8月7日に亡くなりました。ピアノには原爆の爆風で飛び散ったガラスの破片が今も刺さっており、美しい音色とともに、原爆の悲惨さを私たちに伝えてくれています。

コンサートでは、明子さんが大好きだったショパンの曲の中から「別れの曲」が中国大連市出身の二胡演奏者 姜 曉 艷さんとピアニスト新宅雅和さんにより

演奏されました。また、ソプラノ歌手の中川詩歩さんとピアニスト吉川絢子さんによる「夕焼け」、広島市出身でニューヨークを拠点に活動されているジャズピアニスト大林武司さんによる「GO UP HIROSHIMA」、大竹市在住のシンガーソングライターに かいどうかずみ 二階堂和美さんによる「いのちの記憶」などの演奏のほか、大林さん、二階堂さん、姜さんによる「一本の鉛筆」など、平和への思いを被爆ピアノの音色にのせて演奏していただきました。



「夕焼け」を演奏する中川詩歩さん(右)と吉川絢子さん(左)



「一本の鉛筆」を演奏する大林武司さん(左)二階堂和美さん(中央)姜曉艷さん(右)

PEACE キッズキャンパス【11/14(日)】

平和の大切さを考える児童向け芸術ワークショップを開催しました。3歳から12歳までの児童25名と保護者が参加し、平和学習アニメを視聴した後、折り鶴再生紙を使った紙粘土で原爆ドームのオブジェを作りました。広島市立大学芸術学部森永昌司教授指導のもと、色とりどりのモールでドーム部分の骨組みを作った後、折り鶴再生紙の紙粘土で自由に壁を貼り付け、思い思いの原爆ドームを親子で一緒に作りました。

最後はみんなでライトアップし、キラキラと光る作品に歓声があがりました。

参加した児童からは、「楽しかったよ。また来るね。」という声が聞かれ、保護者からは、「子どもと工作をする平和な時間がいつまでも続いてほしい」といったメッセージが寄せられました。

平和学習アニメの視聴と作品づくりを通じて、親子で一緒に平和の大切さにつ



いて考えても 完成した作品を持って並ぶ参加児童と森永教授らう機会になりました。

みんなで伝え合おうヒロシマ・ナガサキ～広島会2021～【11/20(土)】

被爆者が高齢化する中、様々な世代がそれぞれの方法で被爆体験をつないでいくことが大切であるとの思いから、朗読を中心に被爆者の思いを伝える「みんなで伝え合おうヒロシマ・ナガサキ～広島会2021～」が開催されました。このイベントは、日頃から広島市

内で被爆体験記朗読の活動などを行っている様々な団体の有志が集い、初の試みとして企画されたもので、本財団が共催しました。

会場では、広島県内の高等学校放送部の皆さんが被爆者や遺族等から聴き取りながら制作した映像作品の上映のほか、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアの有志や長崎市の朗読グループも参加し、広島と長崎の被爆体験記の朗読や朗読劇などが上演されました。

来場者からは「高校生など、幅広い年齢層の方々の参加があってよかった」「演目も多様であり、平和を考える貴重な機会となった」などの感想が寄せられ、出演者と来場者がヒロシマ・ナガサキの被爆者の思いを共有し、平和への思いを新たに



広島の被爆者岡田恵美子さんの被爆体験記を朗読する高校生

する機会となりました。

ヒロシマ・ピースフォーラム 映画「ヒロシマへの誓い -サーロー節子とともに-」の上映【11/27(土)】

平和文化月間のイベントの締めくくりとして、核兵器禁止条約の発効に尽力され、2017年のICANのノーベル平和賞授賞式で受賞演説をされたカナダ在住の被爆者サーロー節子さんの半生を追ったドキュメンタリー映画「ヒロシマへの誓い -サーロー節子とともに-」を上映するとともに、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターの金崎由美センター長に「核兵器禁止条約発効までのあゆみとこれから」と題してご講演いただきました。

金崎センター長は、核兵器禁止条約についての解り易い解説とともに、締約国会議へのドイツのオブザーバー参加表明について評価しつつ、長年の取材を通して感じたことやサーロー節子さんのエピソードなどを語っていただき、最後に、広島市出身でニューヨーク在住のこの映画のプロデューサー竹内道さんからの「この映画が、皆さんにとって平和な世界のためのアクションを起こすきっかけとなれば嬉しい」との音声メッセージを紹介していただきました。

来場者からは、「小さな行動の積み重ねが大切であると、あらためて感じる事ができた」「サーローさんの言葉一つ一つにエネルギーがあり、感動した」などの感想が寄せられました。



講演の様子と映画のポスター

講演と映画を通して、サーロー節子さんの思いに共感するとともに、日常生活の中で平和を願い、一人一人が小

さなことでも行動していく大切さを来場者の皆様と共有することができたイベントとなりました。

平和文化賞の受賞者が決定！

平和文化月間の取組の一つとして、広島市教育委員会が毎年実施している「青少年からのメッセージ」の応募作品のうち、日常生活の中で「平和」を願う気持ちが強く感じられる4作品を「平和文化賞」として表彰しました。

「こんな広島がいいな」のテーマのもと、自分たちの住むまちを大切に思い、理想とするまちの姿を作文や漫画・イラストで表現するものであり、まさに「平和文化」に相応しいものでした。作品については財団ホームページ（pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/pcfpd/heiwabunkasho.pdf）を御覧下さい。

作文部門 小学生の部

広島市立早稲田小学校六年 中谷 慎二郎

「助け合いの広島」

作文部門 中学生の部

広島市立五日市中学校二年

加藤 舞

「広島だからできること」

作文部門 高校生・一般の部

広島県立可部高等学校三年

桑原 あすか

「私たちが後世に残せること」

漫画・イラスト部門

広島市立高南小学校一年

河野 和希

「へいわがいいな」

(平和市民連帯課)



「へいわがいいな」

被爆体験記朗読会を開催しました



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆体験記や原爆詩を読み語ることによって、多くの人々が被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へ継承していくことを目的として、「被爆体験記朗読会」を開催しています。朗読会では、原爆被害の概要を映像で紹介した後、被爆体験記朗読ボランティアが被爆体験記・原爆詩の朗読を行い、最後に参加者自らが原爆詩を朗読します。

昨年11月21日(日)には、平和文化月間の行事の一つとして、11:00からと14:30からの2回、定期朗読会を開催しました。



被爆体験記朗読ボランティア3名で進行します

広島市にお住まいの方や、県外から旅行で来られた

方、日本に住む米国出身の方など、のべ15人の方が参加しました。

参加者の声

今回で朗読会への参加が3回目になるという保育士の女性は、昭和27年（1952年）に刊行された詩集『原子雲の下より』掲載の、小学校3年生の坂本はつみさんが書いた原爆詩「げんしばくだん」が特に印象に残っているそうです。

「この子は、おばけに会ったことがないのに、被爆して傷ついた人々をおばけに例えています。そのような言葉でしか表現できないほどの恐ろしさだったのだらうなと思います。朗読会に参加することで心が動くと思います。時間も40分と、参加しやすい長さなので、是非いろいろな人に聞いてほしいです」と、話してくださいました。

げんしばくだん（坂本はつみ）
げんしばくだんがおちると
ひるがよるになって
人はおばけになる
出典：『原子雲の下より』 青木書店

ボランティアの声

被爆体験記朗読ボランティアの松尾洋子さんにお話を伺いました。

被爆体験を伝えたい

私は平和記念式典で「平和への誓い」を述べる小学生たちが参加する、「ピースサミット 平和の意見発表会」の司会を26年前から務めています。「子どもたちがこんなに広島のことや平和のこと、身近なことを考えているのに、私は何をしているのだろう」と背中を押される思いがしていました。そんなときに「被爆体験記朗読ボランティア」の募集を知り、朗読を通じて、被爆体験を伝えていこうと思い応募しました。平成16年（2004年）に、第1期生として活動を始めました。



松尾洋子さん

ことばを心に響かせる

被爆者の方々は、私たちには想像もできないような体験や思いをされたと思います。被爆者の心に寄り添い、被爆体験記・原爆詩を繰り返し読み、言葉として発する。それが聞いてくださる方の心に響けばいいなと思って活動しています。

「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」この大きくて優しいメッセージを、受け取った私たちが、伝え続けていかなければならないと思っています。

朗読は奥が深いものです。行間や「、」と「。」の違いの中にも、被爆者の方の思いが込められています。それをいかに私たちがくみ取って伝えられるか。これからは学び続けていきたいと思っています。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

国際フェスタ2021 ～ひらこう世界のとびら であおう世界のなかま～



昨年11月20日（土）、21日（日）の二日間、第22回目となる国際フェスタを開催しました。

今年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため規模を大幅に縮小し、徹底した感染防止対策を講じたうえで、20日にオンライン配信のみで行う6事業を、21日には広島国際会議場を会場として対面及びオンライン配信で行う講演・発表型の3事業、日本文化を体験するための4事業、オンライン配信形式で1事業、二日間合わせて計14事業を行いました。

昨年度にはできなかった、体験型の事業も実施することができ、国際交流・協力をテーマとした有意義な内容で本イベントを開催することができました。（主催一本財団、共催一独立行政法人国際協力機構中国センター（JICA中国）、広島市）

11月20日に実施した事業

昨年度に引き続き実施した、ウェブ会議ツールZoomを使用したオンライン配信事業には、市民団体や公的団体など6団体が、それぞれの事業や団体の紹介、活動発表、講義などを実施しました。

各団体とも、画像や動画を用い、わかりやすく、参加者を飽きさせない、工夫を凝らした内容で実施していました。

実施した事業と団体は次のとおりです。

- ・頼山陽と日本史（Hiroshima's Historiographers）
- ・日本と世界の自然探訪発表会（新日本ガラパゴス研究会）
- ・ユニセフと世界の子どもたち（広島県ユニセフ協会）
- ・青少年の国際交流活動発表会（広島市教育委員会青少年育成部育成課）
- ・広島市立大学国際学部公開講座「現代世界とマイノリティ・多様性－叢書『周縁に目を凝らす』から－」（広島市立大学国際学部）
- ・ヒバクシャと共に歩んだバーバラ・レイノルズ（ワールド・フрендシップ・センター）

11月21日に実施した事業

「ざんねんでも、大好きな動物たち～ASA ZOO 50周年に考える～」

本財団とJICA中国が共同で行う毎年人気のトークショーは、「ざんねんないきもの事典」、「わけあって絶滅しました」の制作者として知られる丸山貴史さんをゲストにお迎えし、動物図鑑の制作活動のために廻った世界各地での異文化体験や、動物たちの、ちょっと「ざんねん」な一面を紹介していただきました。

前半は、イスラエルのダチョウ牧場で言語に戸惑いながら住み込みで働き、周辺の砂漠で動物を探し廻った体験や、アフリカ大陸の最高峰・キリマンジャロの



「さんねんでも、大好きな動物たち」講演の様子

登頂体験を、その時に会った動物達とのエピソードを絡めながら話してくださいました。

後半は、今年開園50周年を迎えた広島市安佐動物公園の動物診療係長、野田亜矢子^{の だ あ や こ}さんにも登壇いただき、対談の形式で、安佐動物公園のエピソードを紹介していただきました。

安佐動物公園がオオサンショウウオを日本で一番多く飼育しており、その理由は、地元で生息している生物を大事にしたからであったこと、日本の固有種と中国から入ってきた外来種との問題など、オオサンショウウオに関する貴重なお話を聞かせていただきました。

「姉妹・友好都市をめぐるバーチャル世界一周～ヒロシマ・メッセンジャーがご案内します！」

世界に6つある姉妹・友好都市との交流の推進役である“ヒロシマ・メッセンジャー”の皆さんが、それぞれの都市を紹介する事業を行いました。計11名のヒロシマ・メッセンジャーの皆さんが民族衣装と、この日のために自分たちでデザインして制作したカラフルなたすきを着用し、とても華やかな雰囲気の中、担当する都市の魅力や広島市との交流の様子を、わかりやすく、楽しく紹介しました。賞品の当たるクイズ大会や抽選会も行われ、参加者のみでなくヒロシマ・メッセンジャー自身も楽しんでいました。参加者からは、「広島市と姉妹・友好都市が活発な交流をしていることを初めて知った。いい機会だった。」などの感想が寄せられました。



令和3年ヒロシマ・メッセンジャーの皆さん

「絶滅に抗した町～スターリングラード戦の歴史的意味」

この講演会は、広島市とロシア・ボルゴグラード市が姉妹都市提携を結んで2022年で50周年の節目の年を迎えるに当り、ボルゴグラード市(旧スターリングラード市)が大きな戦争被害を受けた「スターリングラード攻防戦」の悲惨さを知り、両市の姉妹都市提携の意義を考える機会としました。

講師の^{おおき たけし}大木毅さんは、スターリングラード攻防戦をテーマとした著書「独ソ戦～絶滅戦争の惨禍」が2020年新書大賞を受賞するなど、ボルゴグラード市の戦争被害についての知識が豊富で、講演会では、戦いが起こった経緯、被害の実態や、当時のボルゴグラード市内の様子などを、図を示しながら熱心に語ってくださいました。

講演の最後は質疑応答も行われました。

JICA『地球ひろば』

今年度はオンライン配信形式で2つのイベントを開催しました。第1部では、広島で暮らす外国出身のお二人をゲストに迎え、衣食住や文化についての写真やエピソードトークから出身国を当てる「ミステリーツアー」が行われました。第2部では、西アフリカ・ガーナ共和国に派遣された経験がある元JICA海外協力隊員の方が講師となり、同国の「アディンクラシンボル」について紹介してもらいました。これは、概念や格言を表す記号で、模様やロゴなどに使われ、いくつも組み合わせることで言語によらずコミュニケーションを取る手段としても使用されてきました。最後は参加者がオリジナルの「アディンクラシンボル」を作成し、シンボルに込めた意味などを発表しました。

外国人市民を対象とした日本伝統文化体験

日本伝統文化体験事業は、参加対象を外国人市民に限定し、定員を設けた形で実施しました。

にちわ文化学院講師会サークルの皆さんによるきもの着付体験では、華やかな振袖を着た皆さんが、会場内外で嬉しそうに記念撮影を^{うれ}していました。

国際会議場3階の和室には、上田流和風堂の皆さんによるお茶席を設けました。新型コロナウイルス感染防止のため、時間ごとの参加定員を^{うえ だ りゅう}設けて混雑を回避し、座席の間隔を広くし、お茶碗は使いまわしをしなくても済むよう、使い切りができる紙製の物を使用しました。静かで落ち着いた雰囲気の中、参加者は、上田^{そう じ}宗箇流茶道のお点前を体験することができました。



きもの着付体験に参加した皆さん

茶道体験の様子

このほか会場では、^{やす だ}安田女子大学文学部書道学科の皆さんによる書道体験や、いけばなインターナショナル広島支部の皆さんによるいけばなの展示も実施し、参加者の皆さんに、日本伝統文化を体験していただきました。

(国際交流・協力課)

「原爆の絵」が完成 —高校生たちが被爆体験を絵に描く—

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、被爆者と同校生徒が協働して被爆時の記憶に残る光景を描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

令和2年度から10人の被爆者と18人の生徒が制作を進め、このたび、19点の絵が完成しました。平成19年度（2007年度）に初めて制作を依頼して以来、140人を超える生徒が携わり、171点もの貴重な絵を残しています。

昨年7月5日に基町高等学校で完成披露会が行われました。新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、9人の被爆者（1人欠席）と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コース生徒のほか、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。

証言者の^{あら い しゅんいちろう}新井 俊一郎さんと、2年生の^{やま だつむ ぎ}山田 紬生さんは、『私は原爆^{さくれつ}炸裂の瞬間、^{せんこう}凄まじい閃光と避退するB29を見た』という作品を制作しました。山田さんは完成披露会の前日まで制作に取り組んでいたそうです。



『私は原爆炸裂の瞬間、凄まじい閃光と避退するB29を見た』
(制作：山田紬生、新井俊一郎)

新井さんは、原爆投下当日の朝、東広島市の八本松駅から原爆炸裂の瞬間を目撃しました。目線上で炸裂を目撃した数少ない記録として絵を描いてもらおうと決めたとおっしゃっていました。

山田さんが見たことも聞いたこともないであろうB29爆撃機を描くのは、我ながら無理な注文だろうと当初は思われたそうです。しかし対話を重ね、修正を重ねて作品が完成し、披露できることを大変嬉しく思うと同時に、山田さんを始めとする制作に関わった人に感謝を伝えたいと話してくださいました。

山田さんは、原爆の絵の制作に携わることは大人になってからも活かせる生きた経験になると考え、参加を決意したそうです。絵のポイントである原爆の光を表現するのが難しく、新井さんと一緒に資料映像を何度も見たそうです。それでも不安があったそうですが、新井さんからアドバイスを受けて修正を重ね、新井さんが実際に見た光景に近づけることができたと話していました。山田さんは「この絵を見た人に少しでも原爆の悲惨さが伝わればと思う」という言葉で完成披露のスピーチを締めくくりました。

このたびの制作では、昨年に引き続き、コロナ禍で生徒が被爆者の話を対面で聞くことができない中、電

話で打ち合せをしたり、絵の進捗状況を写真で伝えたりしました。写真と実物では色や見え方に違いがあり、意思疎通に苦労もあったようです。被爆者と生徒のこうした努力により完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話で活用するほか、絵の貸出や、マスコミ等への画像データの提供なども行い、被爆の実相を後世に継承するために今後とも役立てていきます。

(平和記念資料館 啓発課)

東京オリンピック・パラリンピックに合わせたヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展の開催

東京都においてオリンピック・パラリンピック競技大会が開催された昨夏、広島市は、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けた世論の醸成を図ることを目的として、長崎市と共同で被爆の実相や平和への取組を紹介する「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を首都圏3都市（埼玉県飯能市、東京都文京区、東京都千代田区）において開催しました。

飯能市と文京区の会場では、原爆で犠牲になった方の遺品や、被爆の実相と核兵器の現状を伝える写真パネル、被爆者が描いた原爆の絵、高校生と被爆体験証言者が共同で描いた原爆の絵などを展示しました。千代田区の会場では、写真パネルの展示のほか、原爆に関する図書閲覧コーナー、DVD上映コーナーを設けました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、各会場において予定していた被爆体験講話等の関連行事の実施を見送ることになったほか、千代田区



飯能市会場で展示解説を行う広島平和記念資料館長

については、ワクチン接種の会場確保のために当初予定していた会場が使用できなくなり、展示内容を縮小して実施しました。

様々な変更を余儀なくされた中での開催となりましたが、地域住民を中心とした多くの方にご来場いただきました。

来場者に行ったアンケートでは、「本当に悲惨で、こんなことが二度とあってはいけなかった」（10代）、「今普通に生きている事が当たり前ではなく、どんなに幸せな事か。命について考える機会になりました」（20代）、「感染対策の観点から、広島・長崎に気軽に行くことができない中、被爆資料を直に見ることができたことは貴重でした。コロナが収まったら改めて現地の資料館に足を運びたいと思いました」（40代）、などの感想が寄せられました。

実施の概要

【埼玉県飯能市】

期 間：7月18日（日）～9月5日（日）
（休館日を除く44日間）

場 所：飯能市立博物館

来場者数：7,550人

【東京都文京区】

期 間：7月26日（月）～7月30日（金）（5日間）

場 所：文京シビックセンター 1階

ギャラリーシビック及びアートサロン

来場者数：1,703人

【東京都千代田区】

期 間：8月3日（火）～8月13日（金）

（閉庁日を除く8日間）

場 所：千代田区役所2階 区政情報コーナー

来場者数：210人

（平和記念資料館 啓発課）

被爆体験記

平和がどんなに 大切なものか

本財団被爆体験証言者
若山 登美子

広島に大きな爆弾が落ちる

私は当時、国民学校一年生で6歳でした。家は鉄砲町（爆心地から900m）にあり、父（40歳）、母（33歳）、私、妹（2歳）の4人家族でした。学校では授業もありましたが、戦争中でしたので、空襲から身を守るため机の下にもぐる事や安全な場所に身を隠す事を教わり、ほとんどがそういう内容だったと記憶しています。

母に聞いた話では「広島に大きな爆弾が落ちる」という内容のビラが空から落ちてきたそうで、父が母に強く「疎開しなさい」と言い、双三郡河内村にあった母の実家に疎開しました。父は仕事があり、町内のお世話もしていましたから、広島に残りました。

昭和20年（1945年）8月7日、「昨日、広島にこれまでに見たこともない大きな爆弾が落ちた」という話を聞きました。父が河内に来ないので、8月9日、父を捜すため、おばと母が私と妹を連れて4人で広島市内に向かいました。

広島へ

河内村から約6km歩いて三次駅に着きました。爆心地からおよそ60kmも離れている三次駅にも広島で被爆した人たちが運ばれて来ていました。そこで見たのは、頭の髪はジリジリになって無くなり、顔がまん丸く腫れ上がって赤黒い色になり、目がつぶれた人で、

男か女かもわかりません。首から下によごれた灰色の布が掛けられており、担架に乗せられ運ばれて来ました。「お父ちゃんかね？」と言って、4人でのぞいて見たけれど、違う人でした。6歳の私は、大きく腫れた赤黒い顔を見て、どうしてこんな顔になるのか、不思議でたまりませんでした。今でも忘れられません。

三次駅から汽車に乗って広島駅に着き、外に出てみたら、広島は見渡す限り建物が焼け、町が無くなっており、ビックリしました。まだ地面が熱いところもありました。私たちは、我が家の防空壕の中など、あちこち父を捜し歩きましたが、見つかりません。その日は、親戚の人が勤めている広島駅近くの警察署の建物の軒下で、地面の上に座って一夜を過ごしました。

10日の朝早く、そこを出て、鉄砲町の方に向かって歩きました。黒焦げになった木の根っこを背にして人が休んでいるのを見ると、「あー、あれがお父ちゃんかもわからん」と言って走っていき、顔をのぞいて見ました。道や広場で休んでいる人を一人ずつ、何人も見て、捜し歩きました。みんな裸です。顔だけではなく体中がパンパンにふくれあがって、赤黒くなり、まるでお化けのおすもうさんのようでした。



『赤黒く焼けた死体』
制作：森原太一、若山登美子
所蔵：広島平和記念資料館

以前から父と母は、何かあったら、牛田の知人宅へ行こうと約束していたので、行ってみたら、父が避難していました。父は家で被爆し、頭に大きな柱が落ちてきて、脳が見えるくらいの大けがをしており、頭から白い布を掛けていました。布の間から目が見えて、「ああ、登美子か」と、私の名前を呼んでくれた声で、父だとはっきりわかりました。やっと見つけたと思い、ホッとして、とてもうれしかったのを今でも忘れられません。

父を亡くす

父は頭に大けがをしたけれども、やけどはしていないようでした。母の姉（私の伯母）が安芸郡矢野町に住んでいて、その伯母が大八車を借りて迎えに来てくれたので、伯母の家に行って世話になりました。

母は荷物を運ぶ小さい車に父を乗せて近所の病院に通いました。父の頭の傷口にウジがわいてくるので、取ってもらっていました。父は「胸が焼ける、胸が苦しい」と言っていました。みんなが、「ガスを吸うて、胸がつらいんじゃないか」と話していました。その時はわかりませんでしたが、ガスと言われていたのは、実は放射性物質だと知ったのは、ずいぶん後になってからでした。

私は、9月1日から学校が再開したので、^{のぼりちょう} 幟町国民学校から田舎の河内の学校に転校し、おじやお婆の世話になりました。9月14日に「お父ちゃんが死んだよ」と、母が妹をおんぶして父の遺骨を持って田舎に戻りました。父は死ぬ前に母に、「今はまだ死にとうない…登美子らを頼む」と言って死んだそうです。

残留放射能により被爆

矢野の伯母の家に行って一段落したころ、母が鉄砲町の家の防空壕にもう一度行き、ミルクの缶を持って戻りました。缶は変形しており、開けると粉ミルクが^{あめ}飴のように固まっていて、それを金づちで^{たた}叩いて食べました。「おいしい、おいしい」といって食べたんです。

その後、河内村の母の実家で生活していたころ、二年生になった私の顔と手足ができものだらけになりました。母がドクダミ草を^{せん}煎じて飲ませてくれたのを覚えています。いろいろ手を尽くしてくれました。また、歯茎から出血し始めました。でも母には歯茎から血が出ることを言えませんでした。できものができて心配をかけていたので、言えませんでした。今思うと、父を捜して広島市内を歩いたり、被爆したミルクを食べたりしたので、放射能汚染のせいで体調が悪くなったのだと思います。

私たち家族はその後、母の実家で10年間世話になり、おかげで食べるものには困らず生活させていただきました。私が三次高校商業科一年生のころ、母が広島へ出て働き始め、私も二年生から県立広島商業高等学校へ転校しました。当時は、高校を卒業しても一人親だと就職が難しいと聞いていて不安でしたが、おかげさまで就職でき、6年間勤めました。

就職試験の時、最後に面接官に「ところで、お父さんを覚えてる？」と声を掛けられ、「ハイ、少ししか覚えてないけれど」と言った瞬間、涙がワッと出てきました。心の奥では、いつも父を求めていたんだと思います。思いがけない涙が出て、泣きじゃくりながら家に帰りました。父がいないさびしさをすごく感じて、悲しくてたまりませんでした。

平和のありがたさ

私は若いころからずっと貧血と低血圧です。65歳の時には乳がんの手術をしました。また、^{こうじょうせん}甲状腺も悪く、病院に通っています。

妹は^{きんしゆ}大腸がんや子宮筋腫の手術をしました。

母は貧血と低血圧でしんどい思いをしながら働き、私たち姉妹を育ててくれました。母は、私に直接ではないけれど、他の人に「泣いとるヒマはなかった。二人の子供をどうして食べさせていくか、精いっぱい、泣くヒマなんかなかった」と言っていたと聞きました。私たちのような苦しく悲しい思いを、今の皆さんには絶対させたくない。皆さんにお伝えしたいことは、人間が生活していく上で、平和がどんなに大切なものか、

両親、兄弟姉妹、おじいさんおばあさん、友だちがいることは、とても幸せなことだということです。「当たり前」ではありません。

どうか皆さん、自分の生命を大切にしてください。友だちの生命も、自分の生命と同じように大切にしてください。仲良くしていきましょう。お互いに、話し合い、理解しあっていきましょう。それが世界平和への出発点だと信じています。

プロフィール

〔わかやま とみこ〕

小学校一年生であった6歳の時、原爆投下から3日後、父を探しに家族と一緒に広島市内へ入った。2014年に初めて自身の体験を話したことをきっかけに、2016年から被爆体験講話を行う。

広島平和記念資料館本館「市民が描いた原爆の絵」の原画の展示入替

平和記念資料館本館展示「絵筆に込めて」のコーナーには、被爆者が当時の情景を思い出し描いた「市民が描いた原爆の絵」の原画を展示しています。原画は、展示による劣化を防ぎ長期的に保存していくため、毎回テーマを決めて選定し、半年ごとに入れ替えています。今回は、家族や友人など、作者にとって身近な人物を描いた絵6点を選び、入れ替えました。

入れ替えた絵の中に、被爆して避難している途中で座り込み動けなくなってしまった友人の姿を描いたものがあります。作者の松原美代子さんは、当時12歳で^{まつばら みよこ}広島女子商業学校の1年生でした。松原さんは鶴見橋付近の建物疎開作業に動員されて被爆し、体に大火傷を負いました。川へ避難し、そこで同級生の^{みちこ}道子さんと出会いました。道子さんもひどい火傷を負い、二人で助け合いながら火災を逃れました。励ましあいながら避難を続けますが、道子さんは途中で動けなくなりました。絵の中に、火傷で皮膚が垂れ下がった二人が、向き合って言葉を交わしている様子が描かれています。道子さんは松原さんに「自分はもう動けないから、先に行ってほしい。学校の先生に自分がここにいる事を伝えてほしい」と頼みました。松原さんは、ためらいながらもその場を離れ、その後、道子さんは亡くなった状態で発見されました。別れる際に道子さんは目で「連れて行ってちょうだい」と訴えているようにも見え、その姿が松原さんの脳裏から離れることはありませんでした。

作者にとって、被爆時に目の当たりした惨状は思い出すのも辛く、



「市民が描いた原爆の絵」(松原美代子作)

それが自分自身にとって身近な人の姿であれば、その辛さは、例えようのないものだったはずです。それでもなお、筆を取ったのは、その人の被爆当時の状況と存在を描き残し、伝えなければならないという強い思いからでした。

その思いを感じながら、絵に描かれた一人ひとりの姿に向き合っていただけだと思います。次回の入替は今年2月頃の予定です。

(平和記念資料館 学芸課)

資料展「原爆ドームの軌跡—世界遺産登録から25年—」

2021年（令和3年）12月、原爆ドームが世界遺産に登録されてから25年を迎えました。広島平和記念資料館情報資料室では現在、原爆ドームが世界遺産へ登録されるまでの歩みを、東館地下1階で展示しています。写真や当時の新聞記事を中心に45件の資料を掲載した9枚の展示パネルで紹介しています。

被爆直後、原爆ドームは危険物として取り壊される予定でしたが、当時の広島県都市計画課長・竹重貞蔵氏が「原爆の惨状を後世に伝えるもの」として、ほぼ独断で取り壊しを中止させました。

1949年（昭和24年）に実施された「広島市平和記念公園及び記念館設計懸賞」の募集要項は、今回初めて公開された資料です。建築史、建築保存の視点から原爆ドームを研究した^{えばらすみこ} 頼原澄子千葉大学准教授は「これまで6種類の雑誌・新聞の抄録を見たが、募集要項そのものは初めての確認」と言われました。

募集要項の表紙には、当時の原爆ドームのスケッチが配置されており、裏表紙の予定地の地図には、元産業奨励館が示され、現レストハウスは未記載です。「元産業奨励館の残骸は」「存置する予定」との説明もあります。建築や都市計画の専門家が、早い時期から原爆ドームの保存に前向きであったことがわかります。

しかし、広島は復興を優先させるべきであり、惨い原爆の記憶を連想させるものは撤去すべきであるという市民の声もあり、幾度となく原爆ドームの存廃論争が起きました。こうした中、原爆ドームの保存に取り組んだのは「広島折鶴の会」の中・高校生でした。彼らは、「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、

恐る（べき）原爆を訴えてくれるだろうか」と記された、白血病で亡くなった楮山ヒロ子さんの日記に感銘を受け、1960

年（昭和35年）5月5日の集いで、この日記を朗読しました。集会の様子は全国中継され、その折の台本が「広島折鶴の会」世話役だった被爆者の河本一郎氏の資料^{かわもといちろう}にありました。当時は生放送は録画をしなかったので、番組のようすを記した台本は貴重と言えます。

子どもたちの活動は大人たちを動かし、広島市議会^{ひろしま}は、被爆後21年を経た1966年（昭和41年）、ドームの保存を決議しました。

そして、1992年（平成4年）、日本がユネスコの世界遺産条約に加盟したのを契機に、原爆ドームを「核兵器の恐怖を物語る生き証人として」世界遺産にという声が上がりました。連合広島を中心とした広島県内14団体が「原爆ドームの世界遺産化をすすめる会」を結成し、全国的な署名運動を展開。こうした地域の盛り上がりを受けて、1995年（平成7年）、原爆ドームは国の史跡に指定され、世界遺産に推薦されました。翌年12月にメキシコ・メリダで開催された世界遺産委員会において、宮島の厳島神社と共に原爆ドームは世界遺産一覧表へ登録されたのです。

この資料展は3月末まで開催しています。

(平和記念資料館 学芸課)

国際交流・協力課の「民族衣装の日」

国際交流・協力課では、11月12日を「民族衣装で出勤する日」としました。初めてとなる今年度は、チャイナドレス、アオザイ（ベトナムの民族衣装）、アロハシャツ、チマチョゴリ（朝鮮民族の女性の民族衣装）など、カラフルな装いを楽しみました。

8名の外国人スタッフのうち3名は着物を着ました。中には自宅に着物を30枚も持っていて自分で着付ける「和な」アメリカ人スタッフもいます。また、カープユニフォームを着たブラジル人スタッフ曰く、「これは広島の民族衣装！」だそうです。



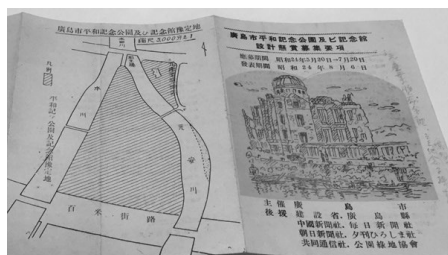
広島市民の国際交流・協力の推進、在住外国人支援などに取り組んでいます（撮影のためマスクを外しています）

普段モノトーンのスーツのみの人や、落ち着いたキャラクターの管理職職員も、初めて見せる陽気なキャラクターに大変身！

国際交流・協力課と広島市・安芸郡外国人相談窓口は広島国際会議場3階に所在します。みなさま、楽しいスタッフがお待ちしている国際交流・協力課に、お気軽にお越しください。

【お問い合わせ】

国際交流・協力課／TEL (082) 242 - 8879



設計懸賞の募集要項(佐藤禎子氏提供)
この募集要項は、「原爆ドームの主治医」と称された佐藤重夫
広島大学名誉教授が残された資料です。

～世界の人とご縁を結ぶ～ 水引細工ワークショップを開催しました

昨年10月31日（日）に西区の己斐公民館で「世界の人とご縁を結ぶ 水引細工ワークショップ」を開催しました。外国人市民と日本人市民が出会い、交流するイベントです。日本の伝統文化である水引を用いて、アクセサリーや小物を作りました。ベトナム人6名、中国人4名、フランス人2名、イラン人1名、メキシコ人1名、ウガンダ人スタッフ1名の外国人15名と、外国人市民への日本語学習支援に関心がある地元の大学生も多数参加して日本人16名で楽しみました。

広島市に暮らす外国人の数は約2万人にもなり、この数は実に中区在住の未成年の数に相等します。これだけたくさんの外国人市民の方が、働いたり、日本の子どもたち同様に学校に通ったりしながら、広島で暮らしています。そんな中、外国人市民と日本人市民が互いに交流する機会を逃しては、とてももったいないのではないのでしょうか。多様性や国際化が叫ばれる今、外国人の方とお話ししたり、友達になって、世界を広げてみたくはないですか？

日本での生活に不慣れなことも多い外国人市民にとって、周囲の日本人と温かな関係を築き、困った時には助けてもらえることや、意思疎通に必要な日本語を習得することはとても大切です。そのため、このイベントでは最初に、相手の言語を参加者同士で学びあい、自己紹介しました。さらに、外国人参加者は日本語で自分の趣味等についても話しました。悪戦苦闘しながらも、互いに新しい文化に触れることの楽しさや喜びを感じると同時に、慣れない言葉を使って異国で生きるということには大きな努力が伴うことを参加者に感じてもらいました。

メインイベントの水引細工では、舟入本町にある吉長酒庫店主の吉長孝衛さんを講師にお迎えしました。吉長さんは贈答用のお酒を飾るために水引細工を学ばれました。以前からピエロに扮して子供たちや福祉施設を見舞うケアリングクラウンとしても活躍しておられる吉長さんは、とても明るく楽しい方で、水引細工を様々な生涯学習講座等で教えて地域貢献していらっしゃいます。

参加者は思い思いの色の材料を選び、ピアスや本のしおり等を作りました。秋らしい色を選ぶ参加者が多い



ワークショップの様子

中、ウガンダ人スタッフは、ウガンダ国旗の3色で葉を作り楽しんでいました。難しい工程では、自然と上手な人が困っている人を助けていたのが印象的でした。

日本古来の縁起物である水引を、外国人市民と日本人市民が共に仲良く教わることができ、とても素敵なひと時となりました。

（国際交流・協力課）

平和教育ウェビナー「世界の青少年による平和活動交流会」を開催

平和首長会議では昨年8月26日、加盟都市等における青少年が主体となった平和活動の活性化を図るため、平和教育ウェビナー「世界の青少年による平和活動交流会」を開催し、YouTubeでライブ配信しました。

交流会では、広島・長崎の団体をはじめ、世界各地で平和活動を行っている9つの団体から13人の青少年が参加し、自身が行っている平和活動について英語で発表するとともに、視聴者からの質問に答えました。その後、参加者同士で行った今後の活動についての意見交換では、「今後青少年をより一層巻き込んでいくためには、彼らが持つ問題意識や興味と、核軍縮や平和活動をうまく掛け合わせた取組を実施すると良い」という意見が上がりました。

さらに、「今回のウェビナーでできた団体間のつながりを活かし、これからも一緒にオンライン行事を開催するなど、連携して平和活動を行っていこう」という提案もありました。彼らの今後の活動に期待しています。

当日の様子は以下のURLからご覧いただけます。

（URL）http://www.mayorsforpeace.org/jp/vision/initiatives_webiner/2021_result.html

（平和首長会議運営課）

記憶を伝える海外の博物館と結ぶオンラインイベントを開催

広島平和記念資料館では、海外博物館とのネットワークを強化するため、核兵器保有国等での「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」開催に合わせて、平和をテーマとした博物館を訪問し、核兵器廃絶や世界恒久平和を目指した取組を共同で展開するなどの連携策について、協議・調整を進めています。

この一環として、米国・ロサンゼルス市にある全米日系人博物館の日本語渉外担当の三木昌子氏をスピーカーに迎え、「記憶を伝える海外の博物館と結ぶオンラインイベント」を昨年9月18日に開催しました。10代から90代まで約190人が参加しました。

全米日系人博物館は、日系アメリカ人の歴史と経験を伝えていくことにより、米国の民族や文化の多様性に対する理解を深めることをミッションとして、1992年に開館し、2019年には、ロサンゼルス市で初となる広島市・長崎市共催のヒロシマ・ナガサキ原爆展を



全米日系人博物館について紹介する三木さん



開催しました。同館が所在するカリフォルニア州には、明治時代から多くの広島県民が移住しており、原爆投下後には広島

の被災状況を知った同州の広島県人会を中心とした人々から多くの支援物資や義援金が届けられるなど、広島と深い繋がりがあります。

オンラインイベントでは、「現在につながる日系アメリカ人の歴史」と題して、日本からアメリカへの移民の始まりから、第二次世界大戦下の強制収容・戦後補償を含む日系アメリカ人の歴史、そして、パンデミックの中でのアジア系に対するヘイトクライムなど現在も続く課題のほか、同館での原爆展の反響等について三木さんからお話いただきました。また、同館のバーチャルツアーも実施され、最後には、参加者との質疑応答の時間もありました。

参加者からは、「日本人の米国移住から第二次世界大戦を経て現在に至るまでのことを、これほど詳しく学べたことはありませんでした。熱意のある講演は分かりやすく、心に届くものでした」、「事実を伝える、残すことの大切さを改めて認識しました」などの感想が寄せられました。また、「海外と広島を結んだオンラインイベントをこれからも行ってほしい」などの要望も多くありました。

本イベントを通して、参加者の方々に、歴史を語り継ぐことの重要性について改めて考えていただく機会を提供することができました。

平和記念資料館では、引き続き、平和をテーマとする海外の博物館とのネットワークを構築し、平和のメッセージを広く発信していきます。

(平和記念資料館 啓発課)

各地で「国際平和デー」記念行事が開催されました！

国連では、毎年9月21日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日としてこの日一日敵対行為をやめるよう呼び掛けています。平和首長会議も「国際平和デー」の趣旨に賛同し、広島市において記念行事を開催しました。

記念行事では、市内被爆者団体の代表者や核兵器禁止条約の早期締結を求める署名活動をしている高校生等を含む約10人が参加しました。参加者は「核兵器廃絶に向け平和への潮流を広げよう！」という平和首長会議の横断幕を掲げ、原爆死没者慰霊碑に黙とうを捧げるとともに、「平和の鐘」を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。

また、平和首長会議の全ての加盟都市に記念行事の開催を呼び掛けたところ、以下の加盟都市から開催報告がありました。各都市で子どもを含む市民が多数参加し、世界各地で市民が平和について考える一日となりました。



各地の記念行事の様子

《記念行事の開催報告があった加盟都市一覧》

- 浦安市（千葉県） ○ハラブジャ（イラク）
- カリエール・スー・ポワシー（フランス）
- マラコフ（フランス） ○エヴォラ（ポルトガル）
- オールダム（英国） ○モントリオール（カナダ）
- マルコス・パス（アルゼンチン）

(平和首長会議運営課)

坪井 直さんを偲ぶ



昨年10月24日、被爆者で本財団評議員の坪井直^{つばい すなお}さんが逝去されました。享年96歳でした。坪井さんは旧制官立広島工業専門学校（現在の広島大学工学部）の学生だった20歳の時に爆心地より約1kmの広島市役所付近の路上で被爆^{じょうなん}しました。

元教諭で、昭和61年（1986年）に広島市立城南中学校長を退任後、被爆者運動に加わり、慢性再生不良性貧血やガンなどの後障害に苦しみながらも、国内外で被爆体験講話等を通じて核兵器廃絶と世界平和を訴えて来られました。日本原水爆被害者団体協議会代表委員、広島県原爆被害者団体協議会理事長などを務められ、平成23年（2011年）には谷本清^{たにもときよし}平和賞を受賞されました。また、平成22年（2010年）から平成31年（2019年）まで広島平和記念資料館展示検討会議の委員として、展示のリニューアルに尽力されました。

「被爆後、簡単に生きてきた訳ではない。考えるのは生きるか死ぬかのことだけであった。被爆者は二重、三重に耐えながらがんばってきた。その事も触れてほしい」との、ご自身の経験を基に発せられる言葉は、展示内容を考える上で職員の大きな励みになり、道標になりました。「伝え続け、決して途切れさせてはならない」という坪井さんの強い思いは資料館の展示に息づいています。

坪井さんのご生前のご功績を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。